

高度管理社会で顕在化

注意力や集中力欠如 大人のADHD

注意力や集中力が欠如し、衝動的で落ちつきがないなどの特徴的な症状を持つ注意欠陥多動性障害(ADHD)。かつては子供に特有のものと考えられてきた。昭和大付属鳥山病院(東京都世田谷区)の岩波明院長に聞いた。

◆大人のADHDの主な症状

〈衝動性〉

- 失言が多い
 - 人の話にかぶせて話す
 - 衝動買いをしてしまう
- #### 〈注意力・集中力の欠如〉
- 仕事などでケアレスミスをする
 - 忘れ物、なくし物が多い
 - 約束や期日を守れない
 - 時間管理が苦手
 - 仕事や作業を順序立てて行うことが苦手
 - 片付けが苦手



※大人の場合、多動の症状はあまり見られない

ADHDは発達障害の一つで、生まれつき脳の機能に障害があるために起きるといわれる。岩波院長は「ADHDは生まれつきの体質であり、病氣という側面だけでなく、個性と

ない。岩波院長は「以前から大人の患者は、現在と同じように存在していました。最近になって、社会全体の管理化が進み、適応しにくい場面が増えたことにより、周囲や自身がADHDではないかと疑って受診するケースが増えています」と話す。

本人が自らの症状や特性に気づき、適切に対処することで、大人にならざるを得ないという。1〜2年後に受診する人が多いという。「学生生活では、遅刻や失言が多くても大きな問題にはなりにくい。しかし、社会人になると、ミスなく確実に仕事を遂行する能力が求められるので、不注意などが顕在化します。業務に支障を来して、上司に勧められて受診する人もいます」と岩波院長。

苦手認識、環境調整を

薬物治療と併用改善

しても捉えることができません」と説明する。

なるころには環境に適應できるようになることも多い。ところが、小児期に成長過程にありがちなことと見過こされると、大人になって職場などで対応できない場面が増え、ADHDが明らかになることがある。仕事を、遅刻を繰り返す、周囲と良

軽症患者では、苦しい場面を認識した上で、対処法を考え、物事がスムーズに進むように「環境調整」を行う。十分改善されない場合、薬物治療と併用することで症状はかなり改善するという。

多動・衝動性、不注意の二つの症状が特徴で、小児期から症状が表れ始める。大人の場合、注意力や集中力の欠如が目立つ。

ADHDの有病率は3〜5%と推測されており、大人の患者も珍しく

診断する際は、幼少期までさかのぼって確認する必要がある。そのため、岩波院長は「初診患者にも診療時間を十分確保できる大病院などの精神科を受診するとよいでしょう」とアドバイスする。

測されており、大人の患者も珍しく

事でもミスや遅刻を繰り返す、周囲と良

「とアドバイスする。」